Accusative Case と Nominative Case について

島崎淳彦

1. accusative 構造の多様性

格の本来的任務とは，客観世界である対象と認識者である主体との接点に位置し，認識の直観と表現の宿命的線条性との隔絶感を融合する事にある。(1) accusatve の場合には，一般にどの言語に於いても，目的語をとらえるという面が重要な機能となって来ている。原初の段階では主体と対象の結節点の位置にあったという事が出来る。結節点とは，いわば主体と対象との接点という意味と，対象の把握の仕方の表現上へのあらわれという意味合いとを兼ね備えたものである。本来，表現に於いては，自己以外は全て対象である。時には自己をも対象化して認識する事も出来る。対象は対象である限り客体的である。格は，対象と主体との接点にあるものだと把握すると，対象を客体的なものとして主体がとらえるところに accusative が成立するものだという事が出来る。accusative 機能の複雑性，多様性は，この根本的な点に起因しているものと思われる。(2)

印欧語の accusative は，前述の目的語をとらえる機能の他に，方向を示すことがよくある。これは，dative 的な用法であって，ある意味では，格機能の重複であると云える。ラテン語，ギリシャ語，サンスクリット語には，この現象が著しいと云われている——Roman eo「ローマ〔を〕へゆく」，domum ibo「家へ帰ろう」=οἶκον ἐλεύσομαι.(3) どちらも，或る行為が，ある場所へ

接近してゆく事を示している。運動としては積極的な方向を取っている。ドイツ語の fragen（たずねる）が，たずねられる人を accusative に置いたり，フランス語の remercier（感謝する）が，やはり感謝される人を accusative に置くのは，この行為の方向の積極性をあらわしているのである。又，英語の to thank は，ドイツ語の danken と同じように，人の dative を支配する。これはアングロ・サクソン語以来の事であるが，今では英語の名詞的要素に格形の suffix が付加しなくなった為に，この意識は既に失われている。日本語の場合（～に感謝する）は，この古い英語のそれに似ている。日本語の「に」の格には，事実，方向の積極性もある。英語の to は，単にこの積極性のみではない。to-morrow, to-night, to-day に見えるように単なる静止の意味もあった。[4] この他，英語やラテン語で，accusative の形態を使っての vocative が存在する。もっとも，accusative のこうした用法は，恐らくは accusative に本来あったものではないと思われる。英語の Ah, me！も本来このままで vocative に働いたものではないと思われる。

尚，日本語の「を」が時に咏嘆の助詞として使用せられたのも，その起源は accusative 的な助詞としての「を」にあるのかも知れない。[5] 又，日本語では，対象を表示するとされている助詞が多く，「が」，「を」は当然として，「の」，「に」にまでその機能があるとされている。格は，対象を対象としてとらえるところに出発点を持っているのは自明の事である。格形のうち，nominative を除外すれば，accusative が最も省略され易いのも，この事と無関係でないものと思われる。即ち，表現するという事は，対象を対象としてすでに認識しており，その時点で格は潜在的にすでに含まれているから，顕現的な形でなくても認識が出来るのである。この他，ヨーロッパ諸語には，古典語時代から，伝統的な表現形式である不定法を伴う accusative（accusativus cum infinitivo）というものがある。そこでは accusative は，不定法の意味上の主語として立つ事が出来る。ラテン語と英語の例を挙げておくと—— Intellego te sapere.（君が賢明である事は私に分っている。），It is impossible for him to solve

the problem.（彼がその問題を解くのは不可能だ。）

これは，nominative と accusative との重複，及び主節と従節の性質という観点から論じられなければならない問題である。因みに，英語では，動名詞の意味上の主語は，genetive で表わされる事は，よく知られている。色々な格形が nominative 的表現をするが，独立構文に限って述べてみると，ここでの意味上の主語は，ラテン語では ablative，ギリシャ語では genetive，ドイツ語では accusative，古代英語では dative，近代英語では nominative が用いられるとされている。

accusative 機能に纏る諸相，諸現象をヨーロッパ諸語及び日本語を中心として略述して来たが，次にハルハ・モンゴル語などアルタイ諸語を主な題材として，形態，機能について若干の考察を試みてみる事にする。尚，現代ハルハ・モンゴル語の例文はロシア文字を使用して表記する。

2. accusative と目的語

いかなる言語に於いても，accusative の第一次的機能は，目的語になるという事であろう。suffix でその機能を明示する場合でも，語の位置，即ち語順でもってそれを明示する場合でも，動詞の目的語を示す事，または目的語になるという事が本来的機能であると思われる。1.でも述べたように，accusative suffix は，nominative に次いで省略され易いのは，表現という行為に於いては，対象を対象としてすでに認識しており，その表現行為の時点で格は潜在的に含まれているのが，根本的な原因であると思われる。しかし，これだけが格形の省略を可能にするのでなく，特に語順の固い言語では，文の形式が一定の範囲に於いて固定している事が省略を促す一要因となっている事は，否定出来ないところである。語順という用語は，一般によく使用されているが，文の形式という観点からみると，範疇順というべきである。[(6)] その理由を若

干，述べてみると次のようになる。言語には一定の範囲に於いて，文の形式が一定している事がある。例えば，日本語では，主語—副詞—目的語—動詞，英語，フランス語では，主語—動詞—目的語—副詞という文形が相当広い範囲にわたって一定している。こういう場合，例えば主語の位置には，主語となり得る名詞または名詞相当語ならば，たいてい自由に立つ事ができる。そこに個々特定の語を選り好みするわけではない。従ってそこに立つのは語の一定の範疇であって，選ばれた特定の語ではない。だからこういう文では，そこに語順の一定があるというよりは，むしろ一定の範疇順があるというべきなのである。

ところで，accusative は，目的語を示すのが本来的機能であるが，これは当然，動詞との関連に於いて説明され得る事である。目的語といっても一般には二つに分類されている。即ち，英文法などでいわれている直接目的語と間接目的語であり，ドイツ語文法でいわれている四格と三格である。換言するとaccusative 表現と dative 表現である。

ハルハ・モンゴル語では，accusative suffix を付加した表現に次のようなものがある。

- Морийг унах.
  （馬にのる。）
- Дайныг ялах.
  （戦争に勝つ。）
- Феодализмыг эсэргүүцэх.
  （封建制度に抵抗する。）
- Түүний үгийг зөвшөөрөх.
  （彼のことばに賛成する。）

この他に accusative を支配する動詞を挙げると，зуйх（～に頼む），усах（～に水をやる），дүүрэх（～に満ちる），дагах（～に従う），зорлих（～に背く），などがある。

トルコ系言語であるヤクート語でも，次のような表現がある。

◦ Ati miinebin.〔i は，accusative suffix〕

（馬にのる。）

満州語でも，同じような表現がある。

◦ Morin be yulufi.....〔be は，accusative suffix〕

（馬にのって……）

このような動詞の格支配の現象は，別に特異な事ではない。現代日本語的発想では，「のる」という動詞では，dative を支配するのが自然のようであり，accusative支配では，いささか奇異に感じるのにすぎない事である。これは，各言語の伝統的，慣習的表現形式の相違に起因する事だと思われる。

次に accusative が方向を指示する機能を持っている事は，ヨーロッパ語を使用して，すでに説明した事であるが，ハルハ・モンゴル語や満州語にも類似の現象が存在する事を例示しておく事にする。

◦ алс хзтийг зорих.

（遠くへ向う。）

◦ bira be doofi.....

（河を渡って……）

更に，vocative 的に，又は間投詞的に accusative を使っている例文を挙げておく事にする。

◦ Чамайг даа, нүдгүй юм үү даа!

（お前か，目が見えないのは。）

3. nominative と accusative の交錯

英語，ラテン語などヨーロッパ諸語には，accusativus cum infinitivo という表現形式があって，不定法の意味上の主語は，accusative の形をとるという事は，すでに述べて来たところである。これは文（節）や句の性質，即ち主文（節）であるか従文（節）であるか，又，その文（節）が名詞的用法であ

るのか形容詞的用法であるのかというような観点から論じられなければならない。この accusative と nominative，あるいはそれ以外の格との関係をハルハ語，日本語などを材料にして若干，論述する事にする。

多くの言語では，一般に nominative には suffix を付加しない。日本語では，nominative 表示の suffix として，「ハ」，「ガ」，「ノ」などを挙げるが，これらも起源的には nominative 表示の格助詞ではないとされている。現代語でも「肉ハ食べない」という発話の「ハ」は，nominative 表示ではなくて，むしろ accusative 表示であるといわれている。「ガ」と「ノ」については，「私ガいった通りだ」と「私ノいった通りだ」という二通りのいい方が現代語では同じように使われているが奈良・平安時代までは，使用法にはっきりした区別があったとされている。(7) 大野晋氏によると，奈良時代までは，「秋ノ野」，「わガ背子」などと，「ノ」も「ガ」も共に「体言ノ体言」，「体言ガ体言」という使い方をしていて，「夜ガ明けた」といった「体言ガ用言」という使い方はまだなく，「夜明けぬ」というように主語には助詞がつかないのが普通であった。即ち nominative 表示の suffix は付加されなかったのである。そして，この時代には，「ノ」は外にあるもの，尊敬すべきものにつき，「ガ」は自分とか親兄弟など身近な存在，あるいは軽蔑すべきものにつく，という使い方の違いがあったのである。この区別は平安時代まで続いていたようで，「今昔物語」とか「宇治拾遺物語」の中に，その例を見い出し得るのである。

ところが，室町時代に入って，固定的な身分関係が崩壊した為，「ノ」は尊敬，「ガ」は非尊敬といった区別がなくなり，「ノ」は「何時もノ調子」などというふうに下の体言にかかる形容語を造る方向に進んだのである。そして，「ガ」の方は，「夜ガ明けた」などと，「体言ガ用言」という形をとって，能動の主体を表示する方向に進むようになった，というのである。ここに「ノ」は genetive 的用法に，「ガ」は nominative 的用法に分離する萌芽が見られるのである。

「ガ」は前にも述べたように，「体言ガ体言」という用法が最も古いものであ

るが，現代語でも「わが国」,「君が代」という用語の中に保存されている。「わが国」といえば，「わが」の方が先にきているから「わが」の方が主であるように見えるかも知れないけれども，実は「わが」というのは人称代名詞の genetive であって，一種の形容語であるといえるのである。「君が代」も，「君が」は「代」の形容語なのである。

万葉集などにも nominative 助詞としての「ガ」は現われていないが，当時，「ガ」が nominative 機能を持たなかった証拠であると考える。

「我が国」の次には，「わが教ふる道」というような形が発達したとされている。この場合には，「わが」は「教ふる」にかかるよりも，「道」にかかるもので，まず「わが道」があって，それと並んで「教ふる道」という表現があったと考える。だから「わが」も「教ふる」もいずれも「道」にかかると見るわけである。つまり「わが国」と同じように「わが道」という表現があって，そのあいだに「教ふる」というのが入って来たと考えるわけである。だからこの場合も「わが」というのは結局「わが教ふる」全体で「道」にかかっているのである。即ち，これも「ガ」は体言と体言の間に入っているものだと考えられるのである。大体，江戸時代以後「私が行く」のように終止形で切れるようになったけれども，それ以前では「私は行く」だけで切って文を終る事は出来なかった。(8) ちょうど，現代語の「の」という助詞が「私の行く」で切れないで「私の行く道は」のように必ず下の方に何か名詞がこないと変な感じがするのと同じ事である。それと同じように「ガ」という助詞も，以前はその下には必ず何か体言がくるものであって，現代語のように用言が来て nominative に機能するようになったのは，比較的新しい事なのである。

ところで，nominative あるいは主語について論じる際には，言語表現の線条性に触れておかなくてはならない。我々が人間としてその場その場の状況を直観的に察知，認識して，適当な行動を起こす為には，いちいちその間に正しい形の言語の流れを介在させなくてもよいと思われる。瞬間に察知し，瞬間に行動する時は，実は，言語表現以前の状態にみずからを置いて，我々は行動し

ているといえるのである。ここには，時間の意識はない。全ては，未だ，表現以前の一つの塊にすぎないのである。言語は，この塊を，時間の進みに合わせて流すところから来ているのである。これが，言語の線条性であって，文が出来，したがって語が出来るのも，この流れ，この線条性の為である。語順の起源，先に述べた表現を使えば，範疇順の起源は，この線条性の中にある。(9) 元来，言語の文の認識，理解には，一種の待機性というものがあった。通例，我我は，唯はじめの一語だけで，全文としていいたい事を表現し切れないし，理解する事も出来ない。最初の一語はその発端であって，その発端から発展すべき一つの発展単位までを述べ終った時，充足感が起って来るのである。充足感を満足させる為には，少なくとも，最小単位として二つの語を連らねなければならない。線条の構成単位はこの発展単位であり，発展単位の終るまで，我々は待機しなくてはならない。表現の単位は，この待機性が充足され，解消されるまでの心理的な時間の単位なのである。線条的な言語を使っている我々は，誰でも皆，待機性がそれに本質的につきまとう事を，習慣的に知っている。故に，その充足されるまでの待機時間内ならば，本来，語順あるいは範疇順は，いかにあってもよいのである。(10) 理解，認識の充足感からみれば，語順，範疇順は，第一義的な問題ではないのである。

語順，範疇順は，固いにせよ，やわらかいにせよ，全てある意味では習慣的な顕現である。しかし，全て習慣のはじめには，固定的な，共通的なものがある。それは，線条の頭に立つものは，全て表現の主語だという事である。表現の主語はいわゆる文法的主語，あるいは心理的，意味的，論理的主語といわれるものとも異なっている。(11) 言語表現の線条性という点からみると，この表現の主語は，文の構成の本質的な一面と大きく関わっていると思われる。

次にハルハ語の nominative と accusative の交錯について若干の考察，分類を試みる事にする。多くの言語がそうであるようにハルハ語などアルタイ系言語も，多くの場合，nominative suffix は付加しないのが普通であった。特

に主語を強調するとか，nominative としての意味が明確でないとか，或いは，主語が数語からなる句なり節である場合以外は，suffix を付加しないのが普通であった。しかし，現代語では，いささかその傾向が薄れて，主語を明示する為に suffix を顕現的に付加する事もあるようである。現代語の suffix は，起源的に二種類に分けられる。先ず，動詞 болох（成る）から派生した болбас, болбал, бол であるが，特に短縮形 бол が一般的によく使用されている。元来，これらは，主語の強調的な明示の役を果したり[12]，「もし…ならば」を表わす仮定法の後置詞であった[13]。もう一つは，人称代名詞の genetive から派生した suffix, нь, чинь, である。personal genetive suffix は，次のようになっている。

	単数	複数
一人称	минь	маань
二人称	чинь	таань
三人称	нь	нь

このうち三人称（単，複）が特に一般的に使用されている。日本語の「ノ」が現代語では，genetive だけでなく nominative にも使用されるが，ハルハ語でも genetive suffix の nominative 的機能の表われであると思われる。日本語とハルハ語には，起源においても，用法の歴史においても並行している点がいくつも見受けられるが，これも，ある意味では用法上の並行を示している例であると考えられる。先に述べた бол も，日本語の比較において分析してみると，同じように平行性，類似性が認められる。即ち，болは動詞 болох（成る）からの派生形であって，もとの用法は，動詞の後について「もし…なら(ば)」を表わす仮定法の後置詞であったという事は，既に述べたところである。日本語の「ナラバ」は，「ナラ」と「ハ」の合成語であると考えられるが，元来，これも動詞「なる」から派生した活用形「…ナラ」+「ハ」が，「ナラバ」や「ナラ」という形態で定着し，主語の強調的意義を担っていると思われるのである。

そういう意味で，現代ハルハ語の nominative suffix である бол，нь，は共に起源，用法の歴史において著しい平行性があるといえる。

尚，この suffix は，他の格 suffix と違って，名詞や名詞相当語の語尾に直接連結させないが，この事は，この nominative suffix が本来，nominative 機能はなくて，既にみてきたように他の要素からの派生的定着である事を示している。格形は，本来あったのではなく，徐々に成立したという事がよくいわれるが，これも将に成立し形成され，現代語において定着したといえるのである。

ところで，accusative suffix は，nominative についで省略され易いと述べた。しかし，これは他の格形と比較してそうであるというのであって，アルタイ諸語に於いても，それぞれ accusative の本来的形態を持っていたとされている。Turkish, Azerbaijanian, Turkmen, Uzbek, Kirghiz, Yakutなどを含む Pre-Turkic や Pre-Mongolian では，その形態は *-γï/*-gi, *-iγï/-igi である。Orkhon-Turkic では，*-γ/*-g, *-ïγ/*-ig となり，Mongolian でも Common-Mongolian では，*-gi>*-ji, *-iji>*-i に発達したと推論されている。(14) 一方，Manchu では，*-ba/*-bă から起って，-wa, -pa, -ba, -ma に発達したとされている。Tungus では，起源的には -i から発達した -a, -ja と -ba がある。-a, -ja は後に parative genetive に発展した。又，-ba は，これらに比べて後になって発生した形態である。(15) 尚，現代ハルハ語の suffixは，(イ) -ыг, (ロ) -ийг, (ハ) -г である。そして，-ыг は，語末音が短母音及び子音に終る男性語の語幹に接尾される。-ийг は，語末音が短母音及び子音に終る女性語と，и に終る語幹，ь に終る語幹，隠れた г に終る語幹，ж，ч，шに終る語幹に接尾される。又 -г は，語末音が長母音，及び二重母音に終る語幹に接尾される。

（例）

(イ) арга（方法）⟶ аргыг

сахал（ひげ）⟶ сахлыг

	наадам	（遊　び）	⟶ наадмыг
(ロ)	бичиг	（書　物）	⟶ бичигийг
	салхи	（　風　）	⟶ салхийг
	төмөр	（　鉄　）	⟶ төмрийг
	заль	（奸　策）	⟶ залийг
(ハ)	тэмээ	（らくだ）	⟶ тэмээг
	нохой	（　犬　）	⟶ нохойг
	тахиа	（　鶏　）	⟶ тахиаг

次に現代ハルハ語の例文を用いて，nominative と accusative, genetive など他の格形との交錯を文（節）や句の性質から分類してみる事にする。(16)

（1） genetive と accusative の場合

(イ) 名詞節が主語になる場合，その節の主語は，大部分 genetive である。

（例）

◦ Миний ийм янзаар явсан нь таныг баярлуулахаас ер гомтгохгүй.

（私が，こんな風に外出した事は，あなたを喜ばしこそすれ，悲します事ではない。）

(ロ) 名詞節が目的となる場合は，その節の主語は，大部分 genetive である。但し，場所を表わす副詞（句）が挿入されると，大部分 accusative となる。

（例）

◦ Энэ хөгшин чоно миний явах гэж байгааг шиншсн байна шүү гэж бодлоо.

（この年とった狼は，私が行こうとしているのを嗅ぎつけているのだなと思った。）

◦ Чамайг тосгоноос ирснийг би түүнээс дуулав.

（君が村から来たという事を私は後から聞いた。）

(ハ) 形容詞節（句）に於ける主語は，必ず genetive である。

（例）

◦ Саяын <u>миний</u> ярьсан үгнүүдийг чи бүгдийг нь ойлгов уу？

（今しがた私が話した事を全部理解しましたか。）

◦ <u>Тэдний</u> орж ирэх хаалга руу үргэлж тормолзон харсаар байв.

（彼が入って来るドアーの方をいつも見ていました。）

(ニ) 副詞節の場合は，suffix，接続詞，後置詞などで区別する。

(i) -хад，-хаар，-могц，-лаар に導かれる副詞節の主語は，主節の主語と異なる場合，大部分 accusative となる。但し，時には，genetive が立つ場合もある。

(ii) 後置詞 хойш（хойно）を含む副詞節の主語が主節の主語と異なる場合，accusative を用いる。主語が共通の場合は，suffix なしである。

(iii) -тал，-тай，зэрэг を含む副詞節の場合，accusative を用いる。

(iv) тул，учир，дараа，хэлв，-вч. を含む副詞節の場合，大部分 suffix なしである。

（例—i）

◦ Өчигдөр <u>намайг</u> гэртээ юм үзэж байхад гэнэт тэр ирлээ.

（昨日，私が家で本を見ていると，突然，彼がやって来た。）

◦ <u>Чамайг</u> надтай ярих юм олохгүй болохоор зүгээр асууж байна.

（あなたが，私と話し合う題目を見つけ得ないので，たずねているのです。）

◦ <u>Намайг</u> <u>ормогц</u> тэр гарав.

（私が入るやいなや彼は出た。）

◦ Багш<u>ийг</u> ном унших<u>лаар</u> бид сонсдов.

（先生が本を読むとすぐ我々は聞いた。）

（例—ii）

◦ Гомб<u>ыг</u> үхсэнээс <u>хойш</u> хүн амьтан энд ойртохоо больжээ.

（ゴンボが亡くなってから，人も動物もここに近づかなくなってしまった。）

◦ Нямаа нөхөртэйгөө сууснаас хойш байшиндаа ганцаараа сууж өнгөрсөн байжээ.

（ニャマーは，夫と結婚してから，建物で1人で座っていたのでした。）

（例—iii）

◦ Намайг ой модны дундуур явж байтал бороо оров.

（私が森の中に入って行くと，雨が降って来た。）

◦ Биднийг очихтой зэрэг галт тэрэг хөдөллөө.

（我々が行くとすぐに汽車が動いた。）

（例—iv）

◦ Одоо би тантай уулзсан тул хүсэл хамгагдав.

（今，私はあなたと会ったので望みが叶えられました。）

◦ Бэлтгэлийн тухай Мичурин мэдэж байсан учир энэ явдал нь түүний сэтгэлиг гүн их хөдөлгөв.

（ベルトゲルに関して，ミチューリンは知っていたので，この事は彼の心を大いに動かした。）

◦ Худалдаан тарсны дараа Раск сурвалжлагдад мэдэгдэхдээ:……

（会議が終った後で，ラスクが記者達に知らせたのによると：……）

◦ Хэрэв тийм алим байдаг бол түүнийг үзэж ургуулсан хүмүүсээс жимс боловсруулав аргыг урч авахыг эрмэлзэнэ.

（もし，その様なりんごがあるのならば，それを見て，育てた人から果実を実らせる方法を，ちょっとでも学びたいと思った。）

◦ Хоёр ангахай галуун сүргээс хоцрохгүй ниссэн боловч ядрах нь хэцүү байлаа.

（2匹のつばめは，雁の群から後れずに飛んだけれども，疲れは激しかった。）

(2) ablative の場合

団体，機関，多数の集団および人名が主語になる場合が多い。

（例）

◦.....чуулганыг гүйцэтгэх захиргаанаас хийлгэнэ.

（……集会を執行機関が開く。）

◦.....тэргүүлэгчдээс зарлан хуралдуулна.

（……幹部会が招集し，開会する。）

◦.....улсаас удирдах.

（……国が指導する。）

◦Октябрийн социалист хувьсгал нь түмнээс явуулсан.

（社会主義革命は，人民が行なった。）

(3) dative-locative の場合

（例）

◦Би танд дуртай.

（私は，あなたが好きです。）

◦Надад энэ ном сонирхолтой.

（私は，この本が面白い。）

(4) instrumental の場合

（例）

◦Тэрээр 1937 онд авьяас билэг, оюун ухааныхаа ид цэцэглэлтийн үед нас нөгцжээ.

（彼は1937年の才能と理智の旺盛な時期に死去した。）

◦Алим нь өнгөөр улаан.

（りんごは，色が赤い。）

◦Тэр хурлаар сонгосон толгойлогч байна.

（彼はホラルが選んだ議長であります。）

◦Энэ жил, идэх амуу будаагаар ховордож мэднэ.

（今年は，食物が乏しくなるはずだ。）

現代ハルハ語は，七つの格形を認めているが，その中で comitative は，形容詞的要素が強くて nominative 的機能を担う事は，まずないとされている。その他の六つの格形は，何らかの意味で nominative 機能に関与しているといえるのである。そのうち (3) dative-locative と (4) instrumental は，一種の二重主語的表現であるとみる事が出来る。この二重主語的表現は，今日の日本語に於いては，口語的な文章語の中にも広く使用されている用法であって，先に述べた「ハ」,「ガ」の用法の違いの面から，しばしば論じられてきた題目である。即ち，「象は・鼻が長い」とか「桜は・花がきれい」といった文に於ける「ハ」,「ガ」の相違の説明にしばしば用いられてきたのである。「ハ」,「ガ」,「ノ」の用法の歴史的変化については，既に若干，論述したところである。ここでは現代語に於ける機能の違いについて補足しておく事にとどめたい。簡単に述べると，既知の情報に新しい情報を追加するのが「ハ」の機能であって，古い情報が主語の場合は「ハ」を採るといってもよいと思われる。これに対して「ガ」は新しい情報，未知の情報を提示する助詞だといい得るのである。(17) この説明だと，なぜ「だれハ来たのか」とはいわないかがよくわかるのである。「だれ」といった疑問詞が既知だという事はあり得ないから，既知の情報につく「ハ」は使えないのである。同様に，「あなたガだれだ」といわない理由もはっきりする。「ガ」の下に来るのは既知の情報であるのに「だれ」は既知であり得ないからである。

ところで，現代ハルハ語には，顕現的に表示する nominative suffix として бол, нь を挙げる事が出来る事は，先に述べた通りである。この二つには，用法上，微妙な相違が認められる。

（例）

◦ Токио бол манай улсын нийслэл хот мөн.

（東京は，我が国の首都である。）

◦ Охидын бие махводын хөгжлийг зөв байлгах нь маш чухал.

（娘達の身体の正常な発育が極めて重要である。）

「бол……мөн」では，「～は～である」であり，「……х нь……」では，「～が～である」である。「ハ」と「ガ」の対立と考えて，現代日本語の用法との平行性が存在するとは，断定しがたいが，ハルハ語に於いて nominative suffix の顕示化の現象は，比較的新しい事であるのだから，仮に平行性が認められるとしても，この点での格意識の共通化は，近年になって進みつつあると見るべきである。

又，(3)の dative-locative を用いての二重主語的表現も，（「～が好きだ」，「～が面白い」のところは）直訳すると「～に於いて愛がある」，「～に於いて興味がある」となる。一種の場所的表現であるが，別に特異な表現ではない。なぜなら，日本語の「頭ガ痛い」の「ガ」は，能動的な nominative の表示ではなく，ある大いなる力の加えられる場所を示すにすぎないという見方があるが，これも，その表現と関連があると考えられるからである。Би танд дуртай.（私は，あなたが好きです。）は，直訳すると「私はあなたに於いて愛がある」であるが，これは，「頭ガ痛い」とか，「雨ガ降る」などと同様に，一種の非人称的表現形式であるとみるのである。そして，この「ガ」には ergativus 的なところがあると考えるのである。ここにも日本語とハルハ語の平行性があるように思われる。ただ，ヨーロッパ諸語には古くからよくみうけられる非人称構文が，ハルハ語や日本語にも存在したのかどうかは，検討してみる必要があると考える。更に，先の (3) dative-locative と (4) instrumental の分類で，(3)は，人称代名詞に関係していて，(4)は，それ以外のものに用いられていると推測されるが，これも，もう少し深い考察と検討を必要としていると考える。

注(1) 拙稿「文法的格について」本誌第11巻第3号，p. 161
(2) 同上，p. 170
(3) 泉井久之助『言語の構造』p. 66
(4) 同上，p. 68

(5) 同上，p. 67
(6) 同上，p. 152
(7) 大野晋「主格助詞ガの成立」『文学』1977年6月号，7月号
(8) 大野晋「文法ぎらい」『図書』1977年1月号
(9) 泉井久之助『言語の研究』p. 189
(10) 同上，p. 190
(11) 同上，p. 192
(12) N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, p. 141
(13) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, p. 281
(14) N. Poppe, *ibid.*, p. 187
(15) G. J. Ramstedt, *Einführung in die Altaische Sprachwissenschaft*, II, p. 30
(16) 拙稿「ハルハ・モンゴル語の instrumental について」本誌第10巻第4号：この論述では一部，手直しして，分類してある。
(17) 三上章『日本語の論理』p. 107